

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 8 年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第 3 号（6 月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理、安全使用
2. 作物に対する安全 適期、適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川、湖沼、海等への汚染防止)
(養蚕、養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

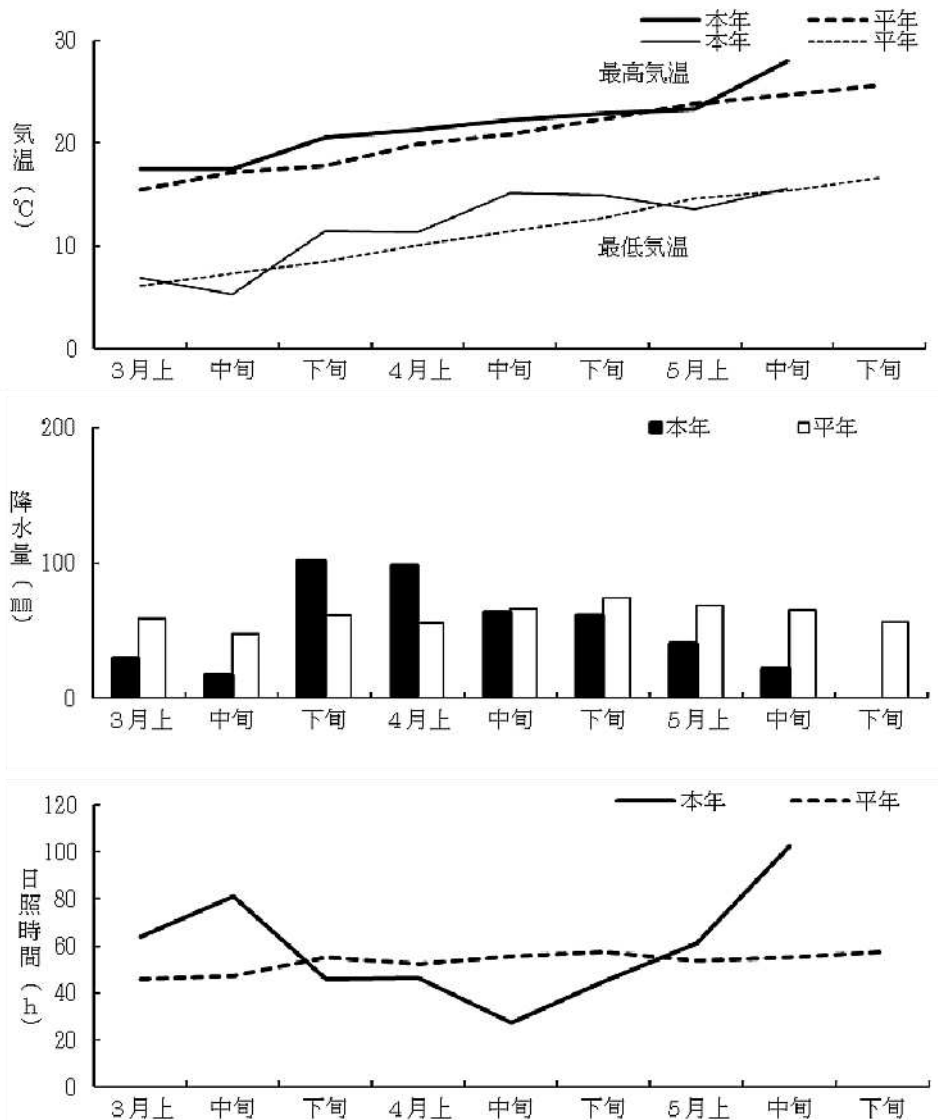
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（5月23日～6月22日） 令和8年5月21日 鹿児島地方気象台発表

要素	地域	確率 (%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	20	70	九州南部、奄美地方ともに気温は高い。九州南部の降水量は多く、奄美地方はほぼ平年並み。九州南部の日照時間は平年並みか少ない、奄美地方は平年並みか多い見込み。
	奄美地方	10	30	60	
降水量	九州南部	20	30	50	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	20	40	40	

II. 3～5月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稲	いもち病	並	並
		紋枯病	並	並
	サトウキビ	黒穂病（熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	多	多
花き	キク（施設）	白さび病（県本土）	やや少	並
		ハダニ類（県本土）	やや少	並
		アザミウマ類（県本土）	やや少	並
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや多	多
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	やや多
		〃（奄美地域）	やや多	多
茶樹	チャ	炭疽病	多	多
		輪斑病	やや少	並
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	並	やや多
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	やや少	並

I. 普通作物

1. 早期水稻

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 0.5%) : 並

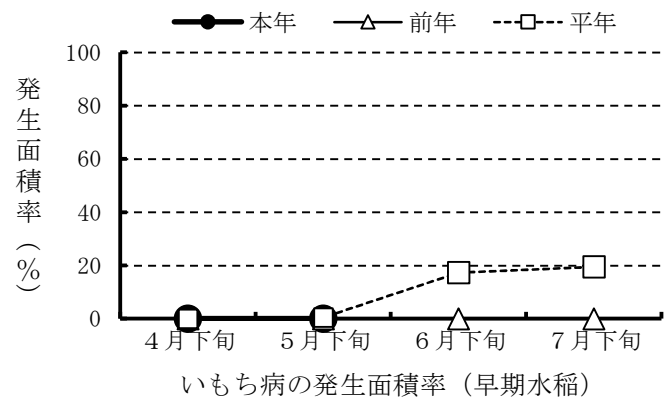
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので、早期発見に努め、発生を認めたら、直ちに防除を行う。

(イ) 出穂期が梅雨期間にあたるので、常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

(ウ) 粉剤・液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ後期に行うが、時期を失しないよう注意する。

(エ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 0%) : 並

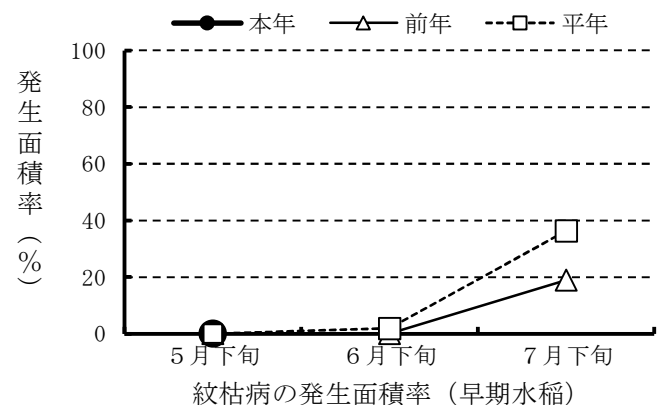
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 粒剤による防除は出穂 30 日前から 10 日前、粉剤・液剤による防除は上位葉鞘への進展期にあたる出穂 1 週間前から出穂期頃に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長する

ので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 過繁茂状態の水田や前年に多発した水田では、発生が認められたら病勢の進展に注意する。



(3) 海外飛来性害虫の飛来状況

ア セジロウンカの初誘殺日

(ア) 予察灯 4月25日 (平年：5月7日)

(イ) 大型吸引トラップ 5月21日 (平年：5月25日)

イ コブノメイガの初誘殺日

(ア) フェロモントラップ 5月23日 (平年：5月22日)

ウ 予察灯等への海外飛来性害虫の誘殺状況は、病虫害防除所のホームページで確認するとともに、本田の見廻りを行い発生に注意する。

表1 予察灯(60W白熱電灯)でのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内:水田)

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
セジ ^レ ロウソウ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
セジ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
トビ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

注) 調査開始日は、4月1日。セジロウソウの初誘殺日は、4月25日

表2 大型吸引トラップでのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内)

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
セジ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
セジ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	1	0	0	0	0					
トビ ^レ ロウソウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

注) 調査開始日は、4月1日。

表3 フェロモントラップでのコブノメイガの誘殺状況(農業開発総合センター内:水田)

月/日	5/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	4	1	0					

注) 調査開始日は、5月1日。

2. サトウキビ

(1) 黒穂病(令和8年度技術情報第8号、令和8年5月27日付参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 熊毛・奄美地域

(イ) 発生量 熊毛地域 並
奄美地域 多

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量: 並
発生ほ場率 0% (平年0%) : 並

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量: 多
発生ほ場率 7.5% (平年0.4%) : 高い
100株あたり発病株率0.1% (平年0.02%) : 高い
一部地域では発生程度の高いほ場が認められている。(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病すると、健全株に比べて茎が細く節間が伸びて徒長する。これらの予兆を認めたら株を抜き取り、ほ場外に持ち出す。

(イ) 鞭状物(いわゆる黒穂)が発生した茎は、胞子の飛散を防ぐために、ビニール袋をかぶせて抜き取り、適正に処分する。

(ウ) 発病ほ場や隣接ほ場から採苗しない。また、来歴の明らかな苗を使用する。

(エ) 植付け時に苗の消毒を行う。

(オ) 多発ほ場や放棄ほ場は、早急に更新し、更新時は抵抗性品種を植え付けるようにする。



Ⅱ. 野 菜

防除に関する今月の留意事項

【イチゴの苗床での病害虫管理】

1. ハダニ類

本ほでの発生は苗からの持ち込みによることが多いので、苗床で以下の防除対策を徹底する。

- (1) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、早期防除に努める。
- (2) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (3) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、薬液が葉裏までよく付着するよう丁寧に散布する。
- (4) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。

2. 炭疽病

イチゴ炭疽病は、風雨や灌水のはね上がりにより感染が広がる。また、気温の上昇に伴い発生が多くなる。梅雨時期を迎え、向こう1か月の降水量は、平年よりも多いと予報されており、感染好適期となる。健全な苗を確保するためにも、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水は可能な限り水滴が細かい灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。
- (2) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (3) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (4) 予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに付着するよう十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (5) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

【施設、露地栽培終了後の病害虫管理】

1. タバココナジラミ

タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、キュウリ/メロン退緑黄化病の病原ウイルスを媒介する。本年4月のトマト調査では、発生ほ場率69%、平年39%で発生程度の高いほ場も認められた。

トマト類、ピーマン、イチゴ等栽培が終了することから、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 栽培終了後は、株元を切断した後すみやかにハウスを密閉し、植物体を完全に枯死させるために蒸し込みを行う
- (2) ハウス内外の除草を徹底し、発生源にならないよう気を付ける。

2. バレイシヨの収穫後の耕種的病害対策

収穫残さが次作での疫病、菌核病、軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので、収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

- (1) 収穫後の発病茎葉やいも、くずいも等は、ほ場および畦畔外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) イネ科牧草等の作付けによる輪作に努める。

【新たにほ場で被害が確認された侵入害虫の留意事項】

1. トマト、ミニトマトのトマトキバガ

本年5月に出水市のミニトマトほ場でトマトキバガによる果実の被害が初確認された。その後伊佐市でもトマトほ場で、幼虫の発生及び被害が確認され、さつま町でも疑わしいほ場が認められている。今後県内での発生拡大が懸念されるため、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ほ場内をよく見回り、疑わしい被害葉、被害果実を発見した場合、ビニル袋等に密封するなど、成幼虫を死滅させたくて、適切に処分する。
- (2) 本種、幼虫の発生や被害を確認したら、トマト、ミニトマトでは本種に登録のある農薬を用いて、使用基準を遵守し、防除する。
- (3) 防除農薬等の詳細については、令和8年5月15日付け技術情報第6号（二次元コード）を参照する。
- (4) 栽培終了後は、ハウスの密閉・蒸し込みを行い、本虫を含む害虫類の防除を徹底する。

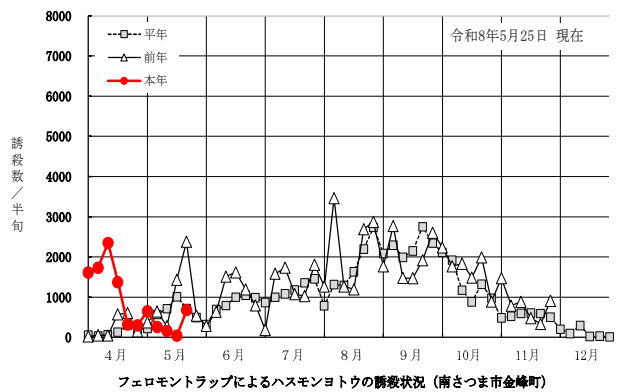


【野菜類・花き共通事項】

1. ハスモンヨトウ

ハスモンヨトウは、南さつま市金峰町に設置しているフェロモントラップの誘殺虫数が4月に急増し、その後5月に入り平年よりも少なく推移していたが、5月下旬から増加傾向にある。本虫は、広食性で多くの農作物を加害する。今後野菜・花きを中心に被害が予想されるため、以下の点に留意しながら適期防除に努める。

- (1) 若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。
- (2) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (3) 中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (4) ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0%（平成 6%）：やや低い

(イ) 気象予報

降水量：多い（+）

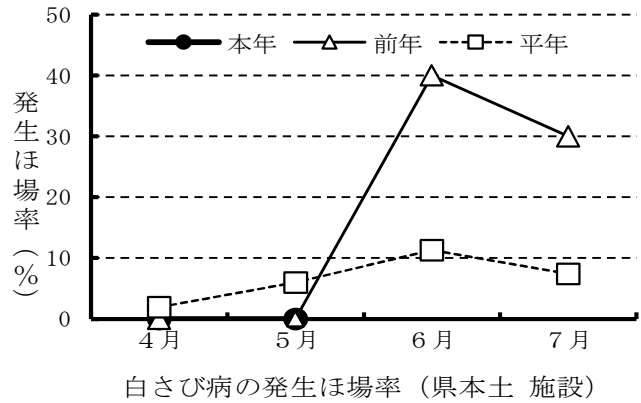
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 母株からの持込みを防ぐため、葉裏までよく付着するよう予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(エ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 30%（平成 36%）：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

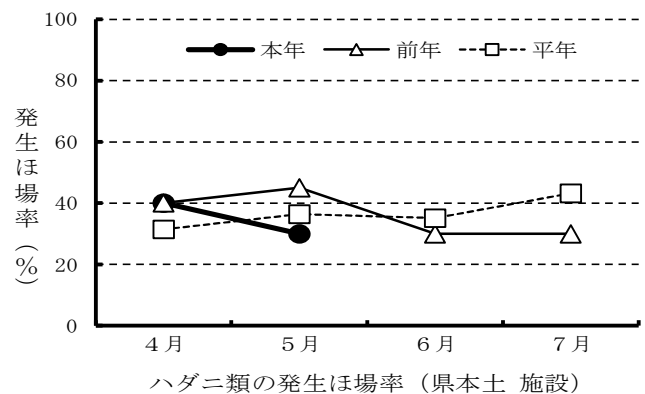
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

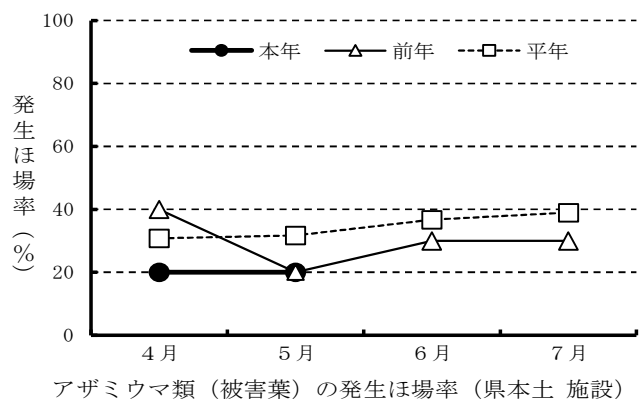
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 20%（平成 32%）：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。
- (イ) クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
- (オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。
- (カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

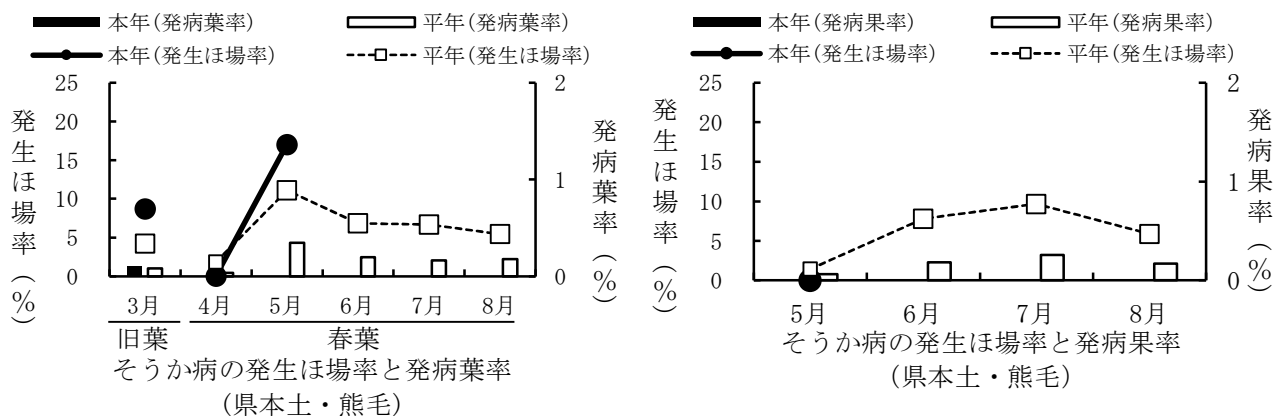
奄美地域 並

イ 予報の根拠

< 県本土・熊毛地域 >

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	やや多	やや少
発生ほ場率	17% (平年 10%) : やや高い	0% (平年 1%) : やや低い
発病率	0.2% (平年 0.3%) : 並	0% (平年 0%) : 並



(イ) 気象予報

気温：高い (+)、降水量：多い (+)

< 奄美地域 >

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	並
発生ほ場率	0% (平年 11%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発病率	0% (平年 0.4%) : 並	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉、発病果は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

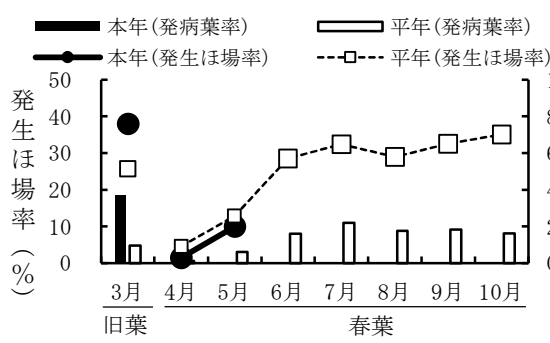
奄美地域 並

イ 予報の根拠

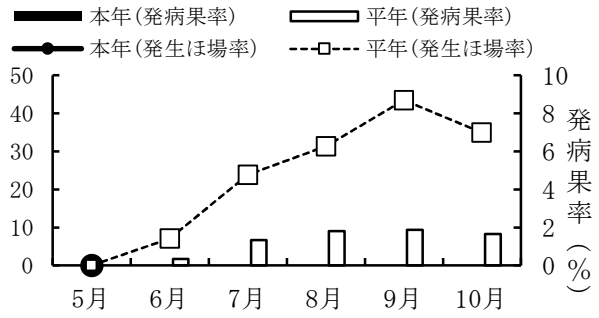
<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発 生 量	並	並
発生ほ場率	10% (平年 13%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0.5% (平年 0.5%) : 並	0% (平年 0%) : 並



かいよう病の発生ほ場率と発病葉率
(県本土・熊毛)



かいよう病の発生ほ場率と発病果率
(県本土・熊毛)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)、降水量：多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発 生 量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 6%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0% (平年 0.1%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

県本土・熊毛地域 やや多

奄 美 地 域 多

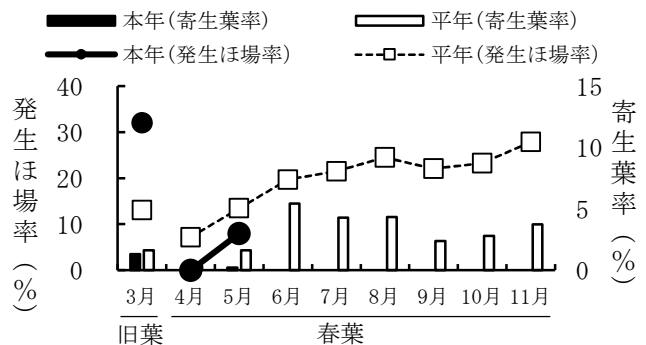
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 並

発生ほ場率 8% (平年 14%) : 並

寄生葉率 0.2% (平年 2.0%) : やや低い



ミカンハダニの発生ほ場率と寄生葉率
(県本土・熊毛)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：やや多

発生ほ場率 14% (平年 0%) : 高い

寄生葉率 0.7% (平年 0%) : 高い

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉あたり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。また、薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一薬剤の殺ダニ剤の使用は年1回とする。

(イ) 殺ダニ剤の効果が低下したほ場では、今後、多発することが懸念されるため、夏季用マシン油乳剤 (97%) を主体とした防除を行う。

(ウ) ただし、夏季用マシン油乳剤は散布後に、油浸斑の発生や光合成低下等による果実品質への影響が懸念されることから、高温時の使用を避ける。そのため、使用時期は、県本土では温州6月上旬~7月上旬まで、中晩柑類7月下旬まで、熊毛・奄美地域の中晩柑類は梅雨明けまでとする。

.....
防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 本病は落花直後~梅雨期に感染が多くなる。

イ 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 本土・熊毛地域の成虫は5月下旬頃 (奄美地域は5月上旬頃) から発生し、6月上旬~中旬が羽化最盛期になる。

イ 本土・熊毛地域の産卵は6月中旬頃 (奄美地域は5月中旬頃) から始まり、7月上旬頃が盛期で、8月まで続く。

ウ 朝夕、成虫の活動が緩慢な時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。

エ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断 (ストックカバー法) すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

【本土・熊毛地域】

時期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生態	←			成虫発生期			→					
				←			産卵期			→		
				←			幼虫食入期			→		
物理的防除法	←			成虫の捕殺			→					
				←			卵の圧殺・幼虫の捕殺			→		
化学的防除法	←			殺虫剤散布			→					

【奄美地域】

時期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生態	←			成虫発生期			→					
	←			産卵期			→					
	←			幼虫食入期			→					
物理的防除法	←			成虫の捕殺			→					
	←			卵の圧殺・幼虫の刺殺			→					
化学的防除法	←			殺虫剤散布			→					

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 67% (平年 46%)

：やや高い

1 m²当り病葉数 13.9 枚 (平年 7.3 枚)

：やや多

発生程度の高いほ場が認められた (+)

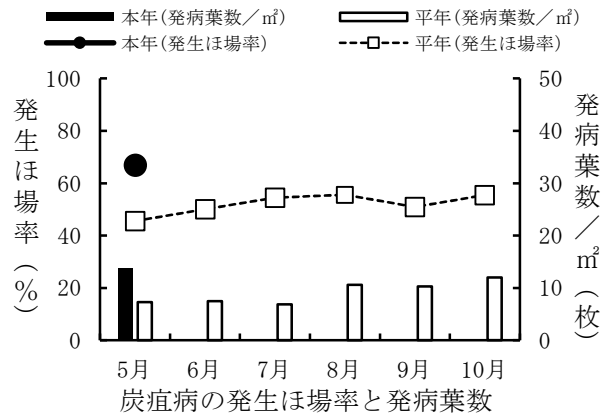
(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 摘採残葉での発生に注意し、やぶきた、おくみどりなどの本病に弱い品種や多発ほ場では、二・三番茶萌芽～1葉期に防除する。

(イ) 多発状態の続く茶園は、二・三番茶後に整・剪枝 (深刈り等) により伝染源を除去する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 5%)

：やや低い

1 m²当り病葉数 0 枚 (平年 0.3 枚)：並

(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

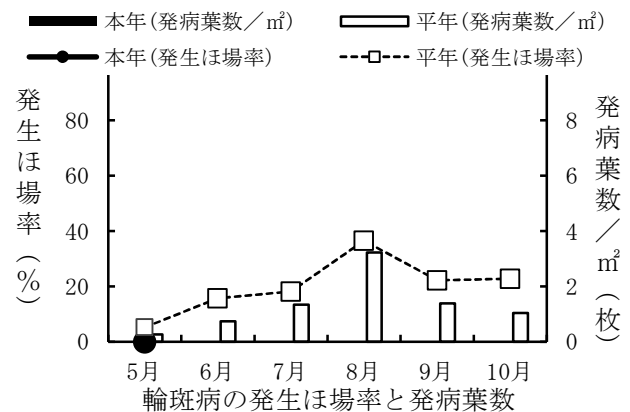
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶の摘採期に降雨が多い場合は、摘採残葉での発生に注意する。

(イ) 農薬に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の農薬を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(ウ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

(エ) ストロビルリン系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。



(3) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 多
 チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

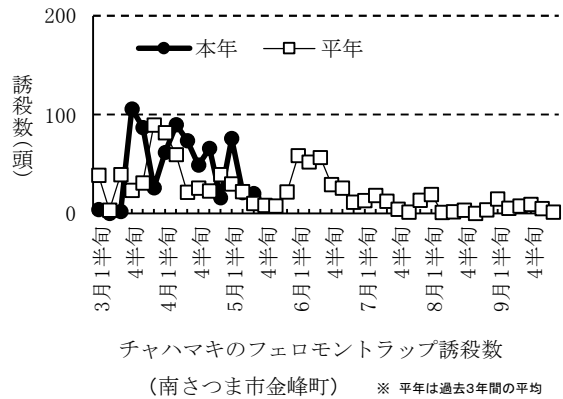
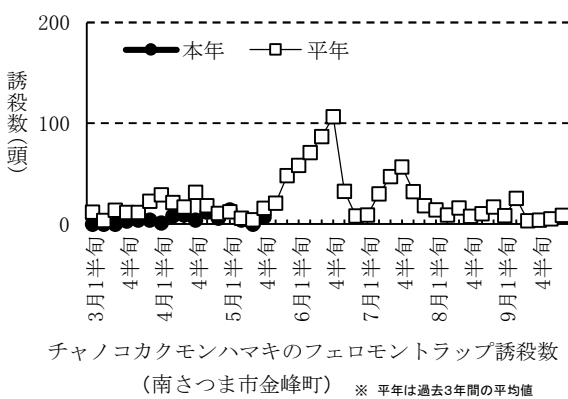
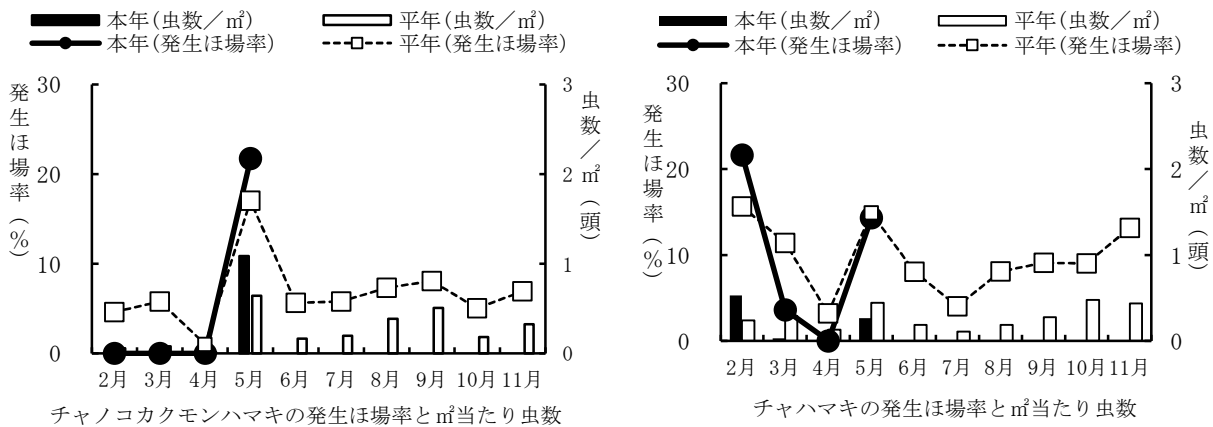
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	多	並
発生ほ場率	22% (平年17%) : やや高い	14% (平年15%) : 並
m ² あたり虫数	1.1頭 (平年0.6頭) : やや多	0.3頭 (平年0.4頭) : やや少
チャノコカクモンハマキでは、発生程度の高いほ場を認めた (+)		
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数 (4月1半旬~5月4半旬)	65頭 (平年167頭)	482頭 (平年321頭) (+)

※平年は、過去3カ年の平均

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多発園で摘採との関係で、適期防除ができない場合は、摘採後早めに防除を行う。農薬の使用にあたっては、摘採前日数を守り、摘採前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。
- (イ) ジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

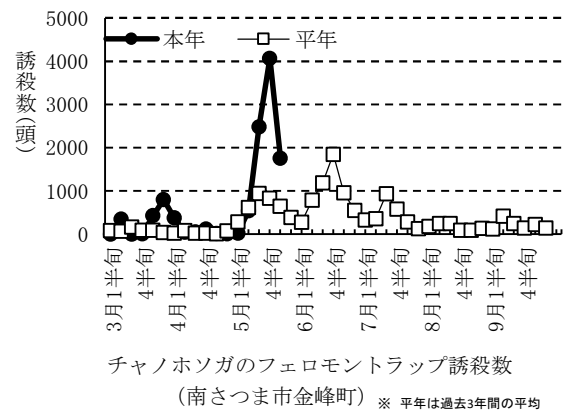
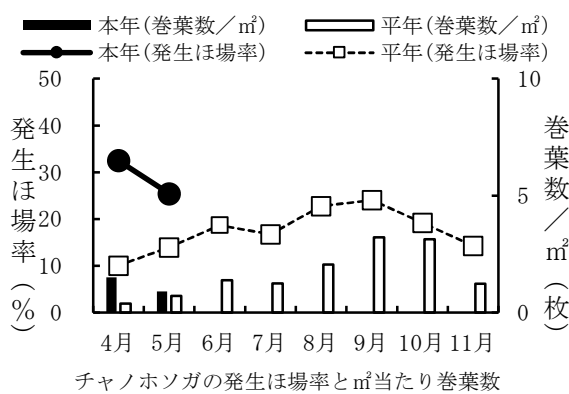
- (ア) 調査結果 発生量：多

【巡回調査】

発生ほ場率 25% (平年 14%) : 高い
 m²当たり巻葉数 0.9 枚 (平年 0.7 枚) : 並

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数 (5月1半旬~5月4半旬) 8,857 頭 (平年 2,663 頭) (+) ※平年は、過去3カ年平均



(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）を守り、摘採前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。
- (イ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ 並

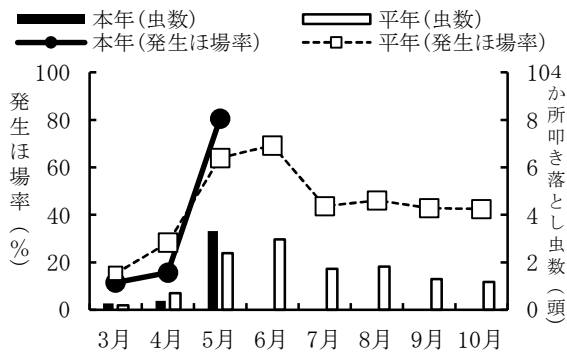
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

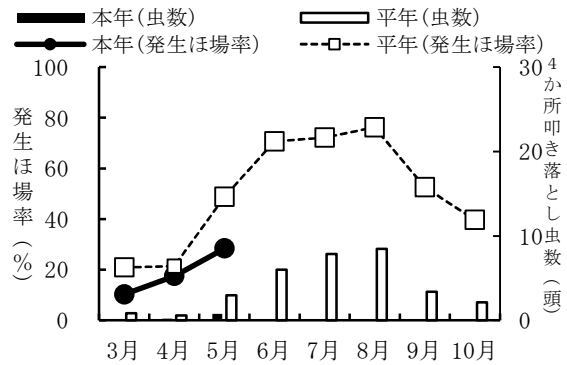
巡回調査	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	やや少
発生ほ場率	81% (平年 64%) : 高い	28% (平年 49%) : やや低い
虫数(4か所たたき落とし)	3.3 頭(平年 2.4 頭) : 多	0.8 頭(平年 3.0 頭) : やや少

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



茶ノミドリヒメヨコバイの発生ほ場率と虫数



茶ノキイロアザミウマの発生ほ場率と虫数

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、二・三番茶萌芽期頃に防除する。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、摘採前日数を遵守するとともに、隣接茶園等へドリフトがないように十分注意する。また、摘採前であることを「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせるなど、ドリフトが起こらないよう注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（炭疽病、茶ノミドリヒメヨコバイ、茶ノキイロアザミウマ、茶ノホソガ、カンザワハダニ等）は適切に行う。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。